

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：34322

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370387

研究課題名(和文) 19世紀末および20世紀初頭のフランス文芸・美術運動における自然観についての研究

研究課題名(英文) Study on the vicissitudes of the notion of nature in the French literature and art movements from the end of 19th to the beginning of 20th century

研究代表者

佐藤 文郎 (SATO, Fumiro)

京都嵯峨芸術大学・芸術学部・教授

研究者番号：30434773

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：19世紀末から20世紀初頭のフランス文学・美術運動において、写実行為を含め自然という概念がどのように特徴的に捉えられていたのか。本研究は19世紀末から20世紀初頭(第一次世界大戦終結までの期間)のフランスにおける文学・美術運動を対象とし、その間の“自然”概念の変容、写実行為に対する視点の変化に着目して文芸作品や雑誌・新聞等に掲載された文芸・美術評論等の一次資料を精査しつつ、芸術思潮上の変遷を位置づけること(特に、ベル・エポック期の芸術文化を19世紀末との関連において位置づけること)、日仏の共同研究体制を強化すること、さらには政治や経済等の社会状況との関連を解明することを目的とする。

研究成果の概要(英文)：Dealing with the art criticisms and literary works from the end of the 19th century until the beginning of the 20th century, we aim at throwing a positivist light on the vicissitudes of the notion "nature, the change of viewpoint onto the act of artistic description. We hold up as our target of 3 years to accumulate referential material, to consolidate our international joint research friendship and to investigate the relationship between the world of literature and fine art and the political and economic context.

研究分野：フランス文学

キーワード：フランス文学 美術評論 自然 ベル・エポック 写実

## 1. 研究開始当初の背景

19世紀末から20世紀初頭(第一次大戦終結以前)の芸術文化に関しては、従来の美術史的言説に加えて、近年、万国博覧会や建築・工業・広告デザイン等の表象文化に関わる言説が盛んになされるようになってきている。自然というテーマに限っても、ゾラやその周辺による芸術論、マラルメのマネ論、アポリネールの文芸作品や美術評論を対象とした研究がなされている。しかし、それらの多くは作家の思想や作品を対象とした個別的研究であり、19世紀末からベル・エポック期までの芸術思潮の変遷を視野に入れた論考はほとんど存在しない。

確かに本研究テーマに関連する形で、マルセルレイモンの『ボードレールからシュルレアリスムまで』(Marcel Raymond, *Du Baudelaire au surréalisme*, J: Corti, 1940)、ミシェル・デコダンの『象徴主義的価値の危機』(Michel Décaudin, *La Crise des Valeurs symbolistes. Vingt ans de poésie française (1895-1914)*, Genève, Paris, Slatkine, 1981(Première Edition: 1960))と題された研究は存在している。特に後者は当時の文芸誌、新聞記事等の一次資料に基づき、当時の文芸思潮の変遷を記述した研究であるが、あくまでフランス文学内の象徴主義運動に対象がとどまり、ベル・エポック期の芸術思潮を19世紀後半からの連続性において捉えているとまでは言い難い。

ベル・エポック期の芸術文化やそれを取り巻く時代文化に関しては、議論を下支えすべき信頼できる基礎資料が多くの場合未整備の状況にあった。そこで、本研究代表者を含む国内のアポリネール研究者数名が中心となって研究チームを組織し、平成19-20年度の科学研究費補助金研究(基盤研究C)「アポリネールの美術評論から見た同時代の美術上の言説およびその変容に関する研究」(課題番号: 19520275)において共同してアポリネール美術評論に関する基礎研究を行った。また、平成21-22年度の科学研究費補助金研究(基盤研究C)『ベル・エポック期フランスの美術評論における「新精神」の形成と展開に関する研究』(課題番号: 215203540001)においてさらに調査対象を広げ、この時代の美術的言説の基礎研究を推進してきた。また、平成21年度から科学研究費補助金(基盤研究C)「アポリネールの文学批評から見たベル・エポック期におけるフランス・モダニズムの諸相」では、アポリネールの文学批評と同時代の分断との関係に焦点を当て、関連資料に関する基礎研究を進めていた。こうした共同研究の過程で、特に“新精神”をめぐる資料研究を通して、アポリネールの芸術論が、前世紀の写実に関する考察を中心として展開してきたことが確認されつつあった。

フランス本国ではゾラやマラルメを代表とする19世紀後半の自然に関する芸術観と20世紀の新たな芸術観を整合的につなぐ先行研

究は明確な形で存在していない。時代をつなぐ群小作家や他の美術評論家の言説に関する広範かつ組織的な調査もなされているわけではない。そこで、フランスにおけるアポリネール研究その他の業績を踏まえながら、むしろ、日仏の研究協力体制を起点にしてベル・エポック期の文学史上、美術史上の明確な位置づけを図っていくこととした。

## 2. 研究の目的

本研究は19世紀末から20世紀初頭(第一次世界大戦終結までの期間)のフランスにおける文学・美術運動を対象とし、その間の“自然”概念の変容、写実行為に対する視点の変化に着目して文芸作品や雑誌・新聞等に掲載された文芸・美術評論等の一次資料を精査しつつ、芸術思潮上の変遷を位置づけること(特に、ベル・エポック期の芸術文化を19世紀末との関連において位置づけること)を目的とする。

本研究の意義は以下の三点にまとめられる。第一に、美術における写実行為の基盤となる自然観において、それまでの“外界としての自然”の描写から、“生成”としての創作観へと移行する概念上の操作が行われていたことを検証することである。つまり、1900年前後に、自然(nature)の語意を生れ出ること、生成することととらえる自然観が文芸論、芸術論において一つの潮流をなしていたことを明示する必要があると考えられている(ちなみに、マラルメのマネ論の存在はアポリネールの同時代人にほとんど知られていなかったと思われる)。この検証が成れば、ベル・エポックが前世代から何を受け継ぎ、何に変更を加えようとしていたのかについて、ひとつの切り口が得られるはずである。

第二に、生の称揚である。ナチュリスト世代やそれに続くアポリネールの世代がニーチェの生成論に触発を受けていたことは、未だに完全な形で学術的な検証を経ておらず、我々は検証作業を進めて問題の詳細を示す必要があると考えている。また進んで、ニーチェの影響が当時の自然観の変更に必然的に関与していたのかについても何らかの見解を得たいと考えている。自然への尊崇が生の称揚につながり、さらにはメシア生成のイメージと重なり合うナチュリスト文学やアポリネール文学に見られるメカニズムの解明にも光を当てたいと考えている。第三は、美術上の流派交代との関係、美術市場との関係である。19世紀から20世紀にかけてはサロンの分裂に象徴されるアカデミスムの決定的な退潮と諸流派の乱立、それに、美術市場の飛躍的な拡大の時期と重なる。これはアカデミスムがそれまで支えてきた共和国理念そのものの変質、美術史上をめぐる経済構造の変化、大衆民主主義の伸長と軌を一にするものではないか。本研究では同時代の経済や政治状況も踏まえながら、メシアの

生成というテーマとの関係性を探っていきたいと考えている。

### 3. 研究の方法

本研究の特色はまず、研究基盤の未整備な時代および領域に対するアプローチである点にある。対象となる時代の美術に関する様々な論考を多様な媒体から入手する必要がある。また、原則的に美術評論において言及される作品を必要に応じて同定する、言及される人物についても事績・業績を精査するという実証性も本研究の目指すところである。さらに、フランスの研究者の協力によって研究資料を入手しなければならない点、フランス本国での研究体制が不十分な点において、本研究課題は両国の連携体制の下で計画を遂行する二国間共同研究としての意義を有していると言える。

研究代表者と研究分担者が電子メールによる密接な連絡体制を敷き、文献調査、報告書作成、海外調査の計画策定等にあたる。また、研究協力者に対して定期的に研究の進捗状況を報告し、調査資料の信頼性や資料探索の方針について意見を求める。研究代表者は情報を一元的に管理し、研究者間の連絡調整を行うとともに、研究の進捗状況に責任を負う。また、各年度終了時に監修者にその時点における研究方針や成果について評価を依頼し、評価結果を翌年度の研究に反映させる。

本研究に関係するのは主に図書館施設である。利用可能な研究者が所属する研究機関の図書館施設を始め、京都大学総合図書館、東京大学総合図書館、文学部図書館を最大限活用する。また、パリ第三、第四大学をはじめフランスの研究者の意見を広く取り入れつつ、フランス本国の図書館・美術館施設を利用できる環境にある。

### 4. 研究成果

3年間の研究期間の到達目標は、1. ベル・エポック期の写実や自然に関する資料を収集し、書誌情報を集積し、データベース化する。2. 研究資料を確保し、国内の研究環境を整備する。3. フランス本国との共同研究体制を強化し、研究者の国際交流を推進する（フランス人講演者の国内招聘を含む）。4. 研究期間終了までに基礎研究結果をまとめ、成果を国内に公表する。5. 以上の活動により、20世紀初頭の芸術思潮研究に対する学術的関心を引き起こし、出版事業および研究推進への国内的コンセンサスを形成する。

平成26年度までの二年間は、収集した基礎資料をもとに、その分析を進めることに注力した。さらに、平成26年度にはフランス、パリ第10大学教授のローランス・カンパ氏を京都に迎えることができ、京都嵯峨芸術大学における講演をはじめ、京都嵯峨芸術大学および同志社大学において連続講演を開催し、同時にアポリネール研究に関する勉強会も企画

した。ベル・エポック期に関する日仏の共同研究体制も確立したものとする。

2018年にアポリネール没後100年を迎える。アポリネールの文学評論・美術評論は未だ日本において網羅的な翻訳が行われていない。これらの翻訳作業も含め、現在までのアポリネール研究の進展を踏まえた新たな翻訳全集を出版することが当面の目標となるだろう。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

伊勢晃、Apollinaire au Japon - Autour de Daigaku Horiguchi、Europe、査読あり、1043巻、2016、227-233頁。

山本友紀、モダン・アートと《自然》の表象 1930年代フランスにおける抽象芸術に関する一考察、芸術工学2014(神戸芸術工科大学紀要)、査読あり、2014。

森田いく子、La Demarche journalistique chez Apollinaire、仏文研究、査読あり、44号、2013、5-29頁。

伊勢晃、アポリネールの女流文学批評 "vrai" と "faux" の観点からの考察、年報フランス研究、査読あり、45巻、2013、49-59頁。

[学会発表](計1件)

伊勢晃、アポリネールとピカレスク文学 芸術家肌の悪党(ピカロ)ドルムザン男爵、日仏文化講座、神戸国際会館、2013年11月26日。

[図書](計2件)

森田いく子、Le Fonds populaire dans la prose d'imagination de Guillaume Apollinaire、パリ第3大学博士論文、単著、2014。

織田晶子、伊藤洋司(他6名、7番目)、アップデートされる芸術 映画、オペラ、文学、中央大学出版局、2013、252頁。

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ等なし

### 6. 研究組織

(1)研究代表者

佐藤 文郎 (SATO, Fumiro)

京都嵯峨芸術大学・芸術学部・教授

研究者番号: 30434773

(2)研究分担者

伊勢 晃 (ISE, Akira)

同志社大学・グローバル・コミュニケーション学部・教授

研究者番号：00379059

伊藤 洋司 (ITO, Yoji)

中央大学・経済学部・教授

研究者番号：10384708

森田 いく子 (MORITA, Ikuko)

京都嵯峨芸術大学・芸術学部・非常勤講師

研究者番号：50460697

山本 友紀 (YAMAMOTO, Yuuki)

京都嵯峨芸術大学・芸術学部・非常勤講師

研究者番号：30537882

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

ローランス・カンパ (CAMPA, Laurence)

パリ第10大学・教授